

Interview 首長

奈良県川上村長 栗山 忠昭氏



地域に誇りと自信取り戻す 住民と行政、協働がカギ

川上村 奈良県東南部に位置し、吉野川・紀の川の源流にある。人口は1643人、面積は約269km²。約95%が山林で、吉野林業発祥の地である。1994年から第3次総合計画で「水源地の村づくり」に取り組み、99～2002年には水源地の森、約740haを購入、源流の保全活動を行う。

——第3次総合計画に「水源地の村づくり」を掲げて20年が過ぎた。

1959年の伊勢湾台風で、村はごろっと変わった。大滝ダムの築造で村は水没し、8000人を超える人口は基幹産業・林業の不振で過疎化、少子高齢化に拍車がかかった。村の未来を模索するなか、86年に「湖底サミット」を開催し、全国からいろんな人たちに集まってもらって意見交換をしたのをきっかけに、大滝ダムも含めた水源地の村づくりとして「樹と水と人の共生」することを決めた。2年後にはその思いを「川上宣言」として全国に発信。和歌山市や大阪工業大との協定や、流域協議会の設立など、活動は多岐に広がっている。

——昨年、日本創成会議が川上村を「消滅可能性全国第

2位」と発表した。人口減少が深刻化している。

役場の職員時代から30年にわたって過疎対策に取り組んできたが、人口を増やすのは至難の業。減少率をいかに鈍化できるか、それと同時に住民がどのように村で暮らしていくかも大事なことだ。

ダム、林業の低迷、人口減少、少子高齢化と先が見えない非常に厳しい時代が住民たちを疲弊させ、「村はダメだ」という思いにさせている。改めて地域の誇りを持って、自信を取り戻し、村のよさを見つけ出すところから始めたい。

——その思いは4月に策定された第5次総合計画のテーマ「都市にはない豊かな暮らしを築く」に反映されている。

第5次総合計画には、6つのプランと15のプロジェクトがあり、住民と行政、団体がともに役割と責任を持って、実践していく仕組みになっている。今まで行政主導が多かったが、行政には行政の、地域には地域の役割があり、それぞれが10年先の村の未来を共有しながら、

くりやま ただあき 1951年川上村生まれ。1969年、奈良県立吉野林業高等学校卒、川上村役場へ。村営「ホテル杉の湯」支配人、産業振興課長、収入役、副村長を務め、2012年7月の村長選で初当選。赤いネクタイは、「村に来られた人たちを、明るく元氣にお迎えしたい」と支配人時代からの習慣。

協働で取り組んでいかないといけない。

すでに、村民の生活を豊かにしつつ、移住を推進する「川上ing作戦」、空き家の情報等を提供する「住まいのネット事業」、外からの目で住民たちと活動をとにする「地域おこし協力隊」、行政職員が集落へ出かける「おてったいさん（集落支援員）制度」、シニア世代が健康で元氣にコミュニティ活動ができる「らくらく元氣塾」、小規模校、少人数を利点に活かした「川上村義務教育プラン」など、ソフト事業に力を入れている。

7月には基幹産業の林業についても、6次産業化をめざした「吉野かわかみ社中」が設立された。いろいろな事業がリンクしながら、地域が元氣を取り戻し、村外に向けて、魅力をしっかり発信していきたい。

（聞き手はコミュニティ

ライター 西久保 智美）